

資格試験受験のためのセルフラーニングツールの開発

Development of a Self-Learning Tool for Certifying Examinations

提出日

2014年1月29日

指導教授

斎藤 正武 准教授

中央大学商学部

学科	経営学科
学籍番号	10C1106006H
氏名	植原 崇裕

資格試験受験のためのセルフラーニングツールの開発

Development of a Self-Learning Tool for Certifying Examinations

斎藤正武ゼミ

植原崇裕

バブル崩壊に端を発する“失われた二十年”に伴う就職氷河期は就活戦争を引き起こし、学生に多大な不安を植え付けた。学生は戦争に生き残るため、自ら武器を手にするを選択する。それは言わずと知れた学歴と、また自分の専門的能力を示すための資格取得であり、それを望む傾向が強くなっている。

資格には、国家資格をはじめ公的資格や民間資格などその主催団体は多岐にわたり、それがもたらす効力も大小さまざまである。資格図鑑（ダイヤモンド社）によれば、日本には1,500ほどの資格が存在するが、中にはまったくその地位を確立できていない資格すらあるという。それでも「履歴書に書きたいから」という理由で資格を欲する学生は多い。

こうした資格ブームの高まりに合わせて、自学用のサービスが次々に立ち上がっている。無料で利用できるものや従来のテキスト学習にはなかったサービスが組み込まれることで学習方法は多様に変化しているが、自学における最大のリスク——元来能動的である学習（自学）の姿勢が、その過程で受動的な姿勢に変化してしまうこと——は無視されている。学習とりわけ自学においては、自らの課題を自ら発見し、解決していくという能動のプロセスが重要となる。

さて、情報化社会と叫ばれて久しい今日、巷には多くの情報機器が溢れかえり、それを目にしない日はない。そんな現代において話題の中心に君臨するのは、一般普及率が遂に五割にまで達するとみられるスマートフォンである。スマートフォンの普及は、人々にインターネットをより身近に、より便利に感じさせたと同時に、多くの情報に触れる機会を生み出した。これほど情報機器は私たちの身近な存在でありながら、現在、企業のIT部門における人材不足が深刻となっている。「IT人材白書2013」（独立行政法人 情報処理推進機構）によれば、IT人材の確保状況は、「大幅に不足している」「やや不足している」という回答を合わせると、企業規模を問わず約九割に達する。進む社会の情報化に相反するように、人材の育成は停滞している。情報化社会とは、一部の開発側と大多数のユーザで構成された情報格差社会であるとも考えられる。これ以上の格差拡大防止のために、情報教育の質の担保は喫緊の課題であるとともに、“大多数のユーザ”は自衛的に情報処理能力を身に付ける必要がある。そこで本研究が目指したのがIPAの主催する情報処理技術者試験である。

本研究では、情報処理技術者試験を対象として、自学における能動のプロセスを組み込んだセルフラーニングツールを開発・実装し、大学生への利用実験から開発ツールの有効性を検証する。